

漢字学習のためのパターンランゲージ

富安慎吾* 秋山佳慧** 浅野浩右** 板倉直哉** 片山佳澄** 松本由美**

*島根大学教育学部初等教育開発講座

**島根大学教育学部学校教育課程初等教育開発専攻

1 はじめに

日本語を学習する上で、避けて通りがたいのが漢字の学習である^{*1}。日本で流通する情報は、多くは書記言語として漢字かなまじり文を採用している状況にあり、現在の学習指導要領では、小学校においていわゆる教育漢字1006字を学習し、中学校において常用漢字の大体の読みを学習することになっている。義務教育修了段階において、教育漢字1006字の読み書きに習熟するとともに、それ以外の常用漢字の大体が読めるようになっていることが見込まれているのである。

では、実際にはどのような状況にあるのだろうか。ベネッセ教育総合研究所が2007年に実施した調査では、小学校の学習者は読みに関してはさほど苦手意識が強くないものの、書きについては学年が上がるごとに苦手意識を強くしていることが明らかになっている。

図3 漢字を「読むこと」が得意・不得意

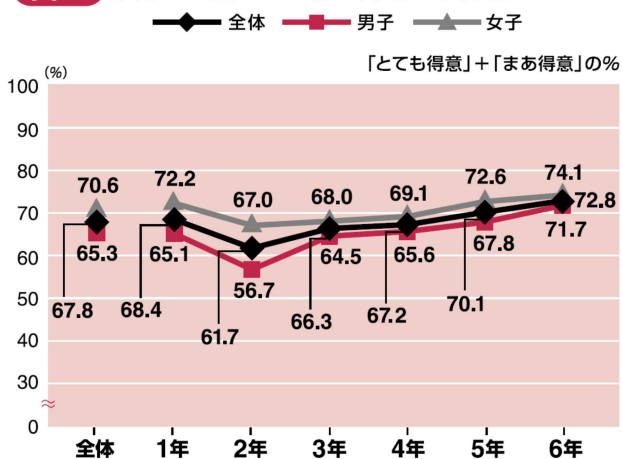
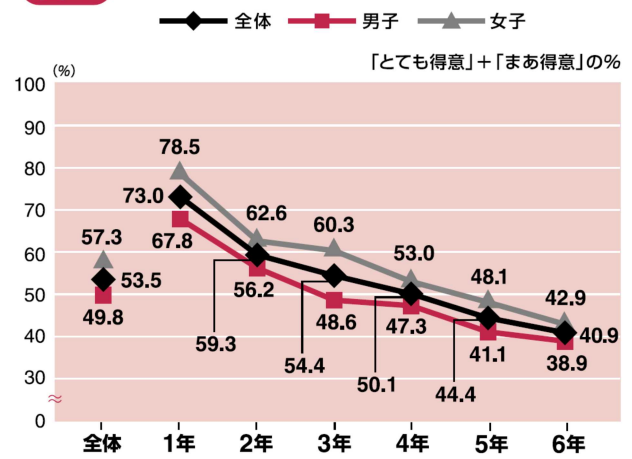


図4 漢字を「書くこと」が得意・不得意



『小学生の漢字力に関する実態調査 2007』 p.42

少なくとも6年生の時点で半数以上が書記言語を使うことに苦手意識を持っているということがわかる。漢字の書きの学習について、特に意識の面での課題が大きい。

これに加えて、漢字の学習は、ただ「文字を覚える」だけの学習ではないことにも注意する必要がある。漢字は表語文字であるため、「字」として「形」と「音」との関連を理解するだけでなく、漢字一字の意味や熟語の意味といった「語彙」としての習得も同時に行わなければならないのである。

本稿は、このような状況を踏まえたうえで、漢字学習に取り組むためのパターンランゲージを提案するものである。

*1 あべやすし[2010]は、日本語における識字の問題について、さまざまな障害が日本語の使用者を阻害していることから、「識字のユニバーサルデザイン」の必要性を指摘している。ここでの「ユニバーサルデザイン」は、「一つのやりかたで解決する」ものではなく、「よりよいデザイン」の「よりたくさんのデザイン」をめざすものとされている (p.291)。「配慮の平等」の観点から考えるならば、漢字を学習する以外の方法で日本語にアクセスし、利用する方法の整備も行うべきであり、そのためのパターンランゲージも必要であると考えられる。

2 漢字学習

2.1 漢字学習の課題

現在において、漢字学習の課題にはどのようなものがあるのだろうか。

1点目に考えられるのは、漢字学習のイメージが狭いことである。

千々岩弘一[2010]は、「漢字指導においては、明治以来さまざまな研究・実践が蓄積されてきたにもかかわらず、未だに百字練習に代表される機械的反復練習や知識の注指的指導の弊害を克服することができ」ていないことを指摘している(p.307)。このことは、漢字学習について広く共有されるイメージが、「繰り返し書く」というイメージに限定され、他の学習方法が語られにくいことを示している。

この点については、学習者の持つ漢字の学習方略について調査を行った山本由紀子[2011]も、「苦手だという友達にアドバイスをするとしたら何と言うか」という質問に対して、「やはり「繰り返し書く」という内容のアドバイスが多かった」と述べている(p.49)。指導者においても、学習者においても、漢字学習については広いイメージを持ちにくい現状があると考えられる。

2点目に考えられるのは、これからの日本語のあり方を念頭においた上での漢字についての議論が十分ではないということである。

幅広い日本語の使用者に対応していくための「やさしい日本語」の提案にみられるように、状況に応じて、日本語をどのようにデザインするかは広く課題となっている。佐藤和之[2009]は、災害時における日本語での情報伝達が被災外国人に十分に対応できていないことを検討したうえで、「日本語学習者が初級段階で学ぶ約二〇〇〇の語彙と単文を種とした単純な構造」でできた「やさしい日本語」の有効性を指摘している(p.181)。ここでは、漢字については、「使用する漢字や漢字の使用量に注意し、漢字を使ったときはルビをふる」(p.182)とされている。しかし、このような「やさしい日本語」と日本語話者の漢字学習との間には、現在のところ、接続が見られず、その存在についても広く知られているとは言いがたい。

また、近年においてはICTの発展にともない、「漢字のデジタル化」が起こっている状況についても指摘がある。棚橋尚子[2013]は2010年に行われた常用漢字表の改定が、出版物などにおける漢字の出現頻度、すなわち「デジタルに打ち出されている漢字」を重視したものであったことを取り上げ、この時代において「手書き」がどのような意味を持つかが模索されていると述べている(pp.295-296)。手書きの機会が減る一方で、変換操作による漢字の使用が増加している現在の日本語環境について、どのような漢字学習が必要かを課題にする必要がある。しかし、この議論についても十分に行われてはいない。

本稿では、特に1点目の課題に着目し、漢字学習のパターンランゲージを記述する。2点目の課題にどのような取り組むかは後述する。

2.2 漢字学習の方法

それでは、これまでにはどのような漢字学習の方法が提案されてきたのだろうか。

小林一仁[2002]は、学習指導の工夫として、「漢字カード(漢字ノート)作り」「点画分解部分」記憶契機法」「字源に着目した記憶諸契機法の研究」「音符・意符による記憶諸契機法の研究」「筆順に関する研究」が行われてきたと整理している(p.337)。

また、棚橋尚子[2013]は2000年代の特徴として、「学習者の興味、関心を高めることを重視する実践」や「学習者の漢字習熟の場の設定を意図した実践」が増加していることを示し(p.298)、「教室における漢字の実践やその研究は、経験的になされている方法を核に複合的かつ広汎になされている」(p.293)と述べ、漢字学習が学習者や指導者の経験に基づきながら行われていることを指摘している。

2.3 漢字学習のイメージを広げるために

では、このように多様な方法が試みられてきたにも関わらず、依然として漢字学習のイメージが狭く限定されていることをどのように解決すればよいだろうか。

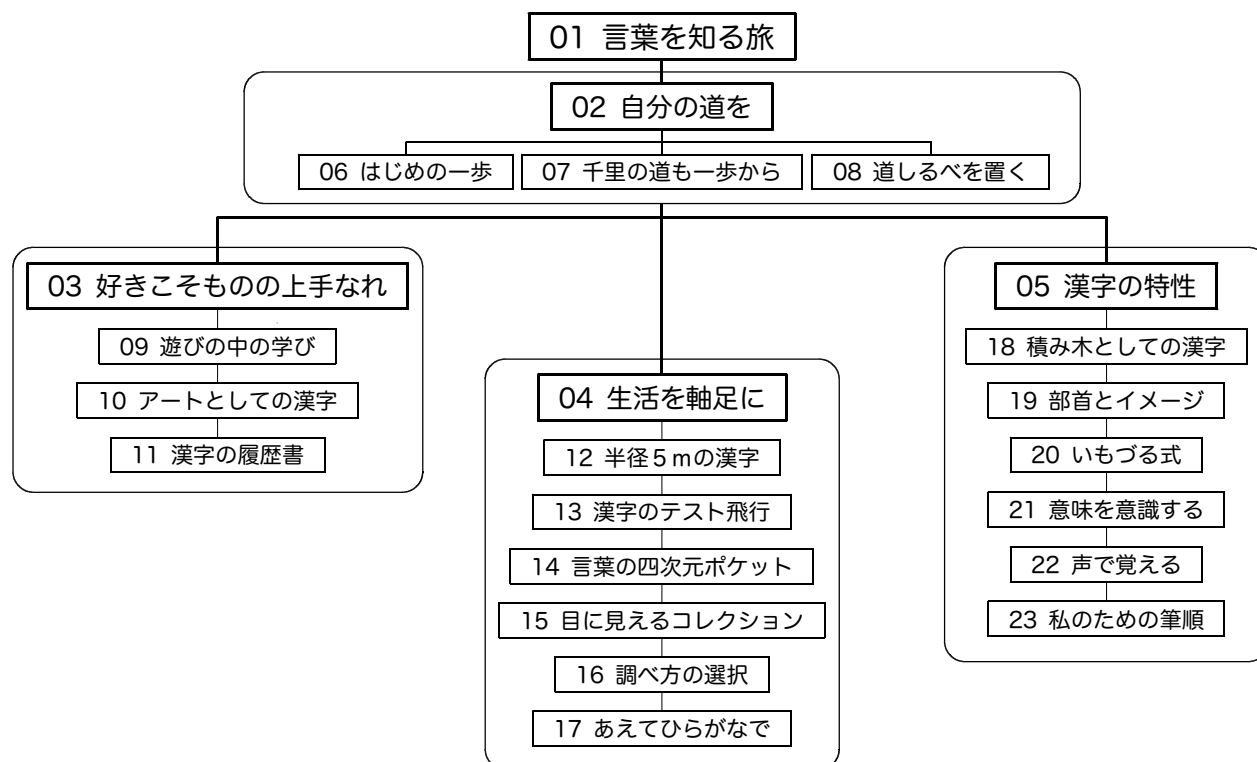
このような状況において、漢字学習の方法をパターンランゲージとして記述することには意義があると考えられる。なぜなら、パターンランゲージは、それぞれの主体が持つ経験的な実践知を記述し、それを元にした対話を媒介するメディアとして有効だからである^{*1}。これまで行われてきた漢字学習の知見をもとにしてパターンランゲージを記述することによって、漢字学習を計画したり、漢字学習をふりかえったりする際に、漢字学習のイメージを広げるためのメディアとして機能することが期待できる。

漢字学習のパターンランゲージを記述することによって、学習者と学習者、学習者と指導者、指導者と指導者などの関係の中で、漢字学習の方法について語り、それぞれの学習や指導へとより広いイメージをフィードバックすることを支援することができると考えられる。

3 漢字学習のためのパターンランゲージ

3.1 全体像

漢字学習のためのパターンランゲージは、以下の構造を取っている。



中心となるパターンとして【言葉を知る旅】(01)を置いている。これは、この漢字学習のためのパターンランゲージが漢字学習のイメージを拡張するものであることを示すパターンである。

その下に位置づくのが、【自分の道を】(02)との関連が強いパターン群である。これらは、【言葉を知る旅】をさらに具体化するものとして、漢字学習の過程を自分自身で構想することを企図したパターン群である。

^{*1} 国語教育におけるパターンランゲージについての研究には、富安慎吾[2013]「知識の創造に資する方略記述実践についての検討:パターンランゲージという方法を中心に」(『国語科教育』74、全国大学国語教育学会)がある。

ここから、さらに3つのパターン群が示される。【好きこそものの上手なれ】(03)、【生活を軸足に】(04)、【漢字の特性】(05)は、それぞれ漢字の学習の仕方について、「漢字を楽しむという視点」「漢字を日常の中で学ぶという視点」「漢字の特性を生かして学習するという視点」から示すパターン群である。

3.2 パターンの形式

本稿では、それぞれのパターンを以下の項目にまとめた。他のパターンへの参照については、【パターン名】で示している。

- 【パターン名】① そのパターンのタイトルを示す。
- 【状況（志向性）】② 問題の発生する状況がどのような志向性を持っているかを示す。
- 【状況（タイミング）】③ 問題の発生する状況がどのようなタイミングであるかを示す。
- 【問題】④ 発生する問題を示す。
- 【フォース（タイトル・性質）】⑤ 問題と解決の背景となる力や要因を示す。概要となるタイトルとその性質の説明からなる。
- 【解決】⑥ 問題を解決するための抽象的な方法・考え方を示す。
- 【方法】⑦ 問題を解決するための具体的な方法・考え方の例を示す。
- 【結果】⑧ 問題が解決されることによって、どのような結果が導かれるかを示す。
- 【関連パターン】⑨ その他のパターンとの関連を示す。

自分にとっての漢字学習について考えたい ②

1

言葉を知る旅 ①

学習をはじめるときに／学習の途中でふりかえるときに ③

《問題》
漢字学習のイメージが狭く限定されてしまっている。 ④

フォース

- ・ 所与の学習
漢字の学習は「しなければならない」ことであり、自分の意志とは関係ないことと思いがちである。
- ・ ドリルとテストの印象
漢字の学習はドリルやテストの印象が強く、暗記することが目的としてイメージされやすい。
- ・ イメージの力
学習の有効性は、学習者が持っている学習へのイメージによって左右されることがある。

⑤

《解決》
言葉について知っていく旅の過程として、学習のイメージを描いてみる。 ⑥

方法

- ・ 他人がどのように漢字の学習を行っているかを聞いてみて、自分の持っている漢字学習のイメージをふりかえてみる。
- ・ 10年後に自分がどのように漢字を使えるようになっていたかを考えて、いまどのような学習をすればいいかを考えてみる。
- ・ 身の回りにどのような漢字の使い方があるかを見渡して、見つけた使い方を実際に行うためにはどのような学習をすればいいかを考えてみる。

⑦

《結果》
ただ暗記するだけではないものとして、漢字学習のイメージが思い描けるようになる。 ⑧

関連パターン ⑨

旅をするためには【自分の道を】(02) 求める必要がある。【生活を軸足に】(03) しながら、【漢字の特性】(04) を生かした学習イメージを描いてみよう。無理に勉強しようと思っても長続きしない。【好きこそものの上手なれ】(05) であることを忘れずに。

3.3 カタログ

次のページからは、漢字学習のためのパターンランゲージを示す。パターンの順番は3.1に示した全体像に示される各パターンの番号に従って配列されている。

言葉を知る旅

学習をはじめるときに／学習の途中でふりかえるときに

《問題》

漢字学習のイメージが狭く限定されてしまっている。

・所与の学習

漢字の学習は「しなければならない」ことであり、自分の意志とは関係ないことと思いがちである。

・ドリルとテストの印象

漢字の学習はドリルやテストの印象が強く、暗記することが目的としてイメージされやすい。

・イメージの力

学習の有効性は、学習者が持っている学習へのイメージによって左右されることがある。

《解決》

言葉について知っていく旅の過程として、学習のイメージを描いてみる。

フォース

- ・他の人がどのように漢字の学習を行っているかを聞いてみて、自分の持っている漢字学習のイメージをふりかえてみる。
- ・10年後に自分がどのように漢字を使えるようになっていたかを考えて、いまだどのような学習をすればいいかを考えてみる。
- ・身の回りにどのような漢字の使い方があるかを見渡してきて、見つけた使い方を実際に行うためにはどのような学習をすればいいかを考えてみる。

《結果》

ただ暗記するだけではないものとして、漢字学習のイメージが思い描けるようになる。

関連パターン

旅をするためには【自分の道を】(02)求める必要がある。【生活を軸足に】(03)しながら、【漢字の特性】(04)を生かした学習イメージを描いてみよう。無理に勉強しようと思っても長続きしない。【好きこそものの上手なれ】(05)であることを忘れずに。

自分の道を

言葉を知る旅の仕方を考えるときに

《問題》

無理に学ぼうとしたり、使おうとしたりすることによって、漢字にふりまわされてしまう。

・長い道のり

漢字は膨大に存在し、その学びは長い道のりになるため、短期的な視点だけではうまくいかない。

・漢字使用のハードル

漢字を使うためには、その文章を書く目的や読者のことを考えたり、適切な漢字を選択したりしなければならない。

・言語使用のメタ認知

言葉をうまく使っていくためには、自分がどのように言葉を学び、言葉を使っているのかを俯瞰する必要がある。

《解決》

自分で意識して、漢字とどのようにつきあっていくのかを考えるようにする。

フォース

- ・まずは興味のある部分から漢字に触れてみるなど、最初の取り組み方を考えてみる。
- ・長い期間学習をしていくことになるので、長期的に少しずつ勉強していくことができるような方法を考えてみる。
- ・目標がないとなかなか学習に身が入らないので、自分が何を目標として漢字を学習するのかを考えてみる。

《結果》

漢字とのつきあいかたを思い描くことができ、自分のペースで漢字について学んだり使ったりすることができるようになる。

関連パターン

自分の道を歩いていくためには、【はじめの一步】(06)を踏み出すことが必要だ。しかし、【千里の道も一歩から】(07)。長く続く漢字の学習を楽しむためにも、【好きこそものの上手なれ】(03)を意識しながら、【道しるべを置く】(08)ことを忘れないようにしよう。

漢字はまずは自分のためのもの。【私のための筆順】(23)を意識するなど、自分のための漢字であることを忘れずに。

好きこそものの上手なれ

言葉を知る旅の仕方を考えるときに

《問題》

漢字に対する苦手意識がある。

・美しさの過剰な要求

「字はきれいなほうがいい」ということを繰り返し聞くと、自分の字をきれいなようになってしまふことがある。

・勉強という強迫観念

漢字を勉強しなければならないと思うと、嫌だと感じてしまうことがある。

・プレイフルラーニング

義務感で行うよりも楽しんで行ったほうが効果があがる場合がある。

《解決》

漢字を書いたり読んだりすることが楽しいと思えるような方法を考える。

フォース

方法

- ・漢字に関するゲームについて、書籍やインターネットなどで調べ、おもしろそうなものやってみる。
- ・漢字をおもしろくアレンジしたポスターや看板を探してみ、自分も同じように漢字で遊んでみる。
- ・漢字の歴史について調べてみたり、字源についてあれこれ創造してみたりして、好奇心に仕掛けて漢字に触れてみる。

《結果》

漢字を書いたり読んだりすることが楽しくなり、漢字学習への意欲が湧くようになる。

関連パターン

漢字の学習を辛いものと考えていると学びも進まない。【遊びの中の学び】(09)であることを思い描いて、【アートとしての漢字】(10)など、楽しく漢字を学ぶ方法を考えよう。

より漢字のことを知りたいと好奇心が湧いてきたら、【漢字の履歴書】(11)を作ってみよう。漢字の持つ歴史について知ること興味を高めることができるかもしれない。

生活を軸足に

言葉を知る旅の仕方を考えるときに

《問題》

漢字を学んだものの、それを日常生活で十分に使うことができない。

・日常生活との乖離

日常生活の中で読んだり書いたりしない漢字はなかなか習得することができない。

・語彙の不足

漢字は表語文字であるため、語彙が不足しているとその漢字を使う場面を思い浮かべることができない。

・必要は学習の母

人は自分にとっての必要性を感じたときにもっとも効率的に学習をする。

《解決》

日常生活から漢字を学び、また、学んだ漢字を日常生活の中で生かそうとしてみる。

フォース

方法

- ・自分の興味のある分野や、必要性の高い分野から学習をはじめ、実際に漢字が使える、という実感を持てるようにする。
- ・言葉を知ることができるように、わからない言葉はすぐに辞書で調べる習慣をつけ、ためしに生活の中で使ってみるようになる。
- ・ただ闇闇に漢字を使うだけでなく、文章の読み手のことも意識して、どのように漢字を使えばいいかを考えるようになる。

《結果》

学んだ漢字について、日常生活において意味のあるかたちで使えるようになる。

関連パターン

生活に軸足を置くためには、身の回り、【半径5mの漢字】(12)から学習を始めてみよう。身近なもので【言葉の四次元ポケット】(14)がたまり、【目に見えるコレクション】が充実してきたら、今度はだんだんと【漢字のテスト飛行】(13)をしなから、学習の範囲を広げていこう。

学習を進めていくためには【調べ方の選択】(16)ができることも重要になる。【あえてひらがなで】(17)書くことも目指そう。

漢字の特性

言葉を知る旅の仕方を考えるときに

《問題》

漢字をなかなか覚えることができない。

・膨大な数

覚える必要のある漢字は多く、簡単にすべてを覚えることはできない。

・複雑な形

漢字の形は日本語の他の文字に比べても複雑であり、正確にその形を覚えることが難しい。

・表語文字としての特性

漢字にはひらがなやカタカナ、アルファベットとは異なる表語文字としての特性がある。

《解決》

無理に暗記しようとするのではなく、漢字の特性をいかして学習するようにする。

フォース

方法

- ・パーツで構成されている特性をいかして、同じパーツを持つ漢字を集めてきて、それぞれにどのような共通点があるかを考えてみる。
- ・部首にイメージがついていることをいかして、「にくづき(月)」など、いろいろな部首について調べてみる。
- ・色々な音がついていることをいかして、声に出しながら漢字を書く練習をしてみる。

《結果》

特性にあった学習をすることで、無理に暗記をするのではなく、効果的な学習をすることができるようになる。

関連パターン

漢字は「形」と「音」と「意味」で構成されている。【積み木としての漢字】(18)として形を意識したら、【部首とイメージ】(19)で【意味を意識する】(21)ようにしよう。特に部首は【いもづる式】(20)に漢字を覚える助けになる。忘れがちだが、音を意識して【声で覚える】(22)ことも大切。手の動きも漢字を覚える助けになるので、【私のための筆順】(23)を考えることもやってみよう。

はじめの一步

学習をはじめるときに

《問題》

漢字の学習を、大変なことや苦痛なこととして感じてしまい、なかなか学習を進めることができない。

・学習方法の単調さ

漢字の学習は、ただ繰り返し書くという作業になってしまいがちである。

・無関心のフィルター

人は、興味のないものについてはなかなか習得しにくいものである。

・好奇心の牽引力

自分の興味のあるものや好きなものについては、他のものよりも習得がはやいことがある。

《解決》

まずは興味のある部分から漢字に触れてみる。

フォース

方法

- ・電車や花の名前、スポーツ用語やゲームの言葉など、自分が興味のある分野の漢字を読んだり書いたりしてみる。
- ・「漢字カルタ」や「漢字しりとり」のような漢字のゲームを遊んでみて、おもしろさに触れてみる。

《結果》

漢字に興味を持つことができ、意欲を持ちながら漢字学習ができるようになる。

関連パターン

漢字しりとりのようなゲームなど、【遊びの中の学び】(09)を意識して取り組むことができることを探してみよう。自分の興味のある分野から【目に見えるコレクション】(15)をはじめていけば、やがて【いもづる式】(20)に知っている漢字も増えていくだろう。

千里の道も一歩から

学習をはじめるときに／学習の途中でふりかえるときに

《問題》

学習した内容をすぐに忘れてしまい、学習の成果を感じられない。

記憶量の限界

人は忘れやすいため、多くのことを一度に完璧に覚えることは難しい。

学習習慣の未定着

復習する習慣が身についていない場合、時間が経つと既習の内容を忘れてしまうことが多い。

記憶の最適化

定期的に記憶を刺激することによって、既習の内容を思い出しやすくなっていく。

《解決》

1日、短時間でも学習する習慣を大切にできるようにし、長期的に見て、漢字を習得することができるようにする。

フォース

- ・「1日に3つの漢字を3回ずつ書く」といったように、1日に学習する量を、具体的かつ無理のない量で設定しておく。
- ・新聞やポスターなど、目に触れるところに漢字に関連したものを置いておき、漢字に触れる機会を増やしてみる。
- ・字を書く場面で、できる範囲で漢字を使うようにし、思い出す練習をする。

《結果》

長期的に定着を図ることによって、より確実に漢字を使えるようになる。

関連パターン

学習した漢字は【漢字のテスト飛行】(13)をして、実際に使ってみよう。【目に見えるコレクション】(15)を壁にはったり、持ち歩いたりするのも有効だ。

道は長い。【道しるべを置く】(08)ことで、ひとまずの目標を決めながら進んでいこう。

道しるべを置く

学習をはじめるときに／学習の途中でふりかえるときに

《問題》

漢字学習に対してやる気がおこらない。

・目標の不明

学習の目標が定まっていなくて、その学習に対して身が入らないことが多い。

・道のりの不鮮明

漢字学習をしていこうと思っても、どこから手をつけて、どうやって進めばいいのかわからない。

・目標に向かう姿勢

人は目標や進む方向が見えていると頑張ることができる。

《解決》

自分で漢字学習の目標を設定し、理由づけにする。

フォース

- ・短期的な目標として、身近なテストなどを設定して、そのためにどうすればいいか手順を考える。
- ・中期的な目標として、漢字検定や趣味など、自分にとって意味のある（利につながる）目標を設定し、そのためにどうすればいいかを考える。
- ・長期的な目標として、目標になるような文章や人を見つけて、そのような文章を書いたり、そのような人になるためにはどのような学習をすればいいかを考える。

《結果》

漢字学習に対するやる気が高まり、見通しを立てて計画的に漢字学習に取り組むことができる。

関連パターン

【千里の道も一歩から】(07)。着実に進んでいくためにも、目標を設定しよう。ただ「書ける」「読める」といった目標だけではなく、【アートとしての漢字】(10)としてポスターにかっこよく漢字を書きたい、といったことや、【漢字の履歴書】(11)を10枚書く、などを目標にしてもいいだろう。

遊びの中の学び

学習をするときに

《問題》

受動的な学習が多く、次第に漢字が嫌いになってしまう。

・ 器の姿勢

ただ教えられた通りのことを繰り返すだけの学習は面白がなく、飽きてしまいやすい。

・ 好奇心の不在

好奇心のないところには、学びが生じにくい。

・ 言葉遊び

日本には古くからたくさんの言葉遊びがあり、言葉を使って遊ぶことができる。

《解決》

熱中しているうちに知識が深まったり、興味が湧いてきたりするような遊びをしてみる。

フォース

方法

- ・ 「さんずい(氵)」のような、特定の部首のつく漢字をどんどんあげていくゲームをやってみる。
- ・ 本当は存在していない言葉表現するために、複数の漢字や部首を組み合わせて「木+火=たいまつ」のような創作漢字を作ってみる。
- ・ 「結婚」→「婚約」→「約束」→「束縛」のように、漢字でしりとりをしてみる。

《結果》

熱中するうちに、自ら進んで漢字について追求したり、調べたりしたくなる。

関連パターン

漢字はパーツによって構成されている。【積み木としての漢字】(18)を生かしたゲームや、【いもづる式】(20)になるようなゲームを考えて、【漢字の特性】(05)を十分に生かすようにしよう。目的が明確なら「同じ部首の漢字を探すためにはどうすればいいだろう」みたいに【調べ方の選択】(16)をすることにもつながっていく。

アートとしての漢字

学習をするときに

《問題》

自分の字が汚く感じてしまい、漢字が好きになれない。

・ 文字の規範

点画を厳しく評価されすぎると、自分の文字を減点法で見えてしまうようになることがある。

・ マンネリの悪循環

繰り返し書く学習をしていると、一字一字がおざなりになり、文字の形が崩れて余計に汚くみえてしまう。

・ 様々な書体

漢字には様々な書体が存在し、ユニークな表現方法も多様に用いられている。

《解決》

正しいかたちにはこだわらず、自分がおもしろいと思う書き方で漢字を書いてみる。

フォース

方法

- ・ 過去の漢字であり、象形文字に近い「金文」を調べてみて、身近なものを表現してみる。
- ・ 自分の名前の漢字をアレンジして、特製の名札や名刺を作ってみる。
- ・ コンピューターに入っている色々なフォントを組み合わせ、ポスターなどに使う漢字をきれいにみせる工夫をしてみる。

《結果》

漢字の形を工夫することがおもしろくなり、漢字を操作することが好きになる。

関連パターン

書いたものは【漢字の履歴書】(11)に加えて、【目に見えるコレクション】(15)にしておこう。【調べ方の選択】(16)をして、昔の漢字を調べてみるのもおもしろい。

漢字の見た目についてよく考えることは【あえてひらがなで】(17)書くべきときを考えるときにも役立つだろう。

漢字の履歴書

学習をするときに

《問題》

ひとつひとつの漢字について、興味を持つことができない。

- ・無意味な記号という認識

漢字の形をただの決まりとして捉えると、暗号を覚えるような作業に思えてしまう。

- ・似たような漢字

漢字は複雑なパーツで構成されており、その組み合わせをただ覚えようとするると似たような漢字を混同してしまう。

- ・字源の存在

定説は決まりがたいが、漢字には複数の字源の説が存在し、辞書などに記載されている。

《解決》

漢字の字源を調べたり、その部首である理由を調べたりしてみる。

フォース

方法

- ・色々な辞書で字源を調べてみる。説が異なっている場合があるので、複数の説をノートに書き出して、どの説がしっくりくるかを考えてみる。
- ・「漢」のように、なぜ「さんすい(彳)」なのかがわからないような漢字を取り上げて、その部首である理由を調べてみる。
- ・「猫」と「描」のような似ている漢字を集めてみて、どのような違いがあるのかを調べてみる。

《結果》

それぞれの漢字に来歴があることがわかり、細かな違いにも興味を持つことができるようになる。

関連パターン

字源などを調べるためには、色々な辞書や本を引くことになる。【調べ方の選択】(16)をしながら調べよう。字源を知ること、【意味を意識する】(21)ことにもつながっていく。

特に部首については、過去の形を知ることが【部首とイメージ】(19)を結びつけるためにも役に立つだろう。

半径5mの漢字

学習の対象を決めるときに

《問題》

学習しても漢字を思うように使えず、手ごたえがない。

- ・学年別漢字配当表の偏り

学年別漢字配当表は必ずしも日常生活に対応しておらず、使わない漢字を先に学習してしまうことがある。

- ・常用漢字外の漢字

人物名や地名に使用される漢字の中には常用漢字外のもがあり、学校で習わない場合がある。

- ・必要度の異なり

個人によって必要度の高い漢字や興味のある分野の漢字は異なっている。

《解決》

自分の生活において、必要度の高い漢字から優先して学習する。

フォース

方法

- ・自分の名前や住んでいる地域の地名などを漢字で書けるように練習する。
- ・買い物に行ったときや町を歩いているとき、新聞を読んでいるときなどによく見かける漢字を集めて学習する。
- ・動物の名前や植物の名前、電車の名前やゲーム用語など、興味のある分野の漢字を覚える。

《結果》

日常生活の中でよく使用する漢字を読んだり書いたりすることができるようになり、手ごたえを感じられる。

関連パターン

もっとも効率が良いのは自分の好きな分野の漢字を学ぶこと。【好きこそもの上手なれ】(03)を忘れずに【はじめの一步】(06)を踏みだそう。

しかし、いつまでも自分の身の回りの漢字だけを学んでいては世界が広がっていかない。だんだん半径を広げていくためにも【言葉の四次元ポケット】(14)を意識して、新しい分野の言葉も吸収していこう。

漢字のテスト飛行

学んだ漢字を活用しようとするときに

《問題》

漢字を学んだはずなのに、日常生活の中で活用することができない。

・ペーパーテストのための学習

漢字のテストはどうしてもペーパーテストが多いため、そこでいい点数をとることを目的にしてしまいがちである。

・ペーパーテストの限界

現在のペーパーテストでは、評価することができる漢字の力は限られている。

・実地試験

身につけた知識や技能が本当に使えるかどうかは、実際の生活の中で試してみなければわからない。

《解決》

学んだ漢字を、実際の生活の中で間違いをおそれずに使ってみる。

フォース

方法

- ・毎日が漢字のテストであると考え、どのようなときに漢字や熟語を使うことができるかを考え、実際に使ってみる。
- ・漢字の正確なカタチが思い出せなくても、すぐにひらがなを使うのではなく、間違ってもいいので漢字で書こうとしてみる。
- ・類語辞典を引いて、「走りました」を「力走しました」と描いてみるなど、自分の言いたいことが熟語ではどのように表現することができるかを調べ、使ってみる。

《結果》

間違えながらも日常生活の中で漢字を使う機会が増え、次第に使える漢字が増えていく。

関連パターン

間違いは恥ずかしいことではないと考えることが大事。【半径5mの漢字】(12)で練習しながら、【言葉の四次元ポケット】(14)に使える漢字や熟語をどんどん入れていこう。使った漢字を【目に見えるコレクション】(15)にしておけば、テスト飛行の足跡を見ることができて、満足感も高まるだろう。テスト飛行を助けるための【調べ方の選択】(16)もしておきたい。

言葉の四次元ポケット

学習をするときに

《問題》

漢字を学んでいるものの、言いたいことが十分に伝えられていないように感じる。

・語彙の欠如

言葉のレパートリーが少ないと、伝えたいことを適切な言葉で表現できないため、読み手に伝わらない。

・日本語の特性

日本語には熟語(二字熟語)でしか表せない概念も多いため、熟語を知らなければ表現できることに限界がくる。

・熟語の活用

特に抽象的なことがらについては、熟語を用いることで適切に言い表せる場合がある。

《解決》

熟語のレパートリーを増やすことができるような漢字学習をおこなう。

フォース

方法

- ・読書をしているときにわからない熟語があれば、すぐに調べるようにする。
- ・新聞を読んでいるときに知らない熟語があれば、その意味を調べ、意味と合わせて記事をノートにスクラップするようにする。
- ・熟語のクロスワードゲームをする。どのような熟語があるかを知るとともに、問題文や解説を読むことで、意味や用法も身につけることができる。

《結果》

使うことができる語彙が充実し、言いたいことをうまく伝えることができるようになっていく。

関連パターン

熟語は漢字と漢字の組み合わせ。一字一字の【意味を意識する】(21)ことも大切。読みが難しい場合もあるので【声で覚える】(22)ことも意識しよう。自分が続けられる【調べ方の選択】(16)も忘れずに。先は長い。【千里の道も一歩から】(07)だ。とはいえ、熟語は使いすぎると逆に理解しにくくなってしまふ。ときには【あえてひらがなで】(17)書くことも忘れずに。

目に見えるコレクション

漢字を学習したあとで

《問題》

一度覚えた漢字も忘れていってしまう。

・記憶量の限界

人が意識できる記憶には限度があるため、見ることや使うことの少ない漢字から忘れていってしまう。

・短期記憶の消失

知らない漢字を調べても、覚えているのはその場だけで次第に忘れていってしまう。

・反復による記憶の強化

人は反復して見たり、使ったりしているものは記憶に残る。

《解決》

学習した漢字を目に見える形で残しておき、見直すことができるようにする。

フォース

方法

- 漢字学習をするときや調べたときに、暗記カードを用意して、表に学習する漢字とその読みを書き、裏によく使われる用例や意味、印象に残るような使い方を書き、束にしていくようにして残していく。
- 新しく学習した漢字や調べた漢字をよく目につく場所にカレンダーのような形で貼っておく。その月ごとに学習した漢字を張っておき、漢字カレンダーをつくる。

《結果》

一度学習した漢字を何度も見直すことになり、漢字を忘れにくくなる。

関連パターン

コレクションは楽しくするもの。ときには【アートとしての漢字】(10)を書いてみたり、【漢字の履歴書】(11)も加えてみよう。コレクションを増やすという【道しるべを置く】(08)ことで学習の目標にもなっていく。

【部首とイメージ】(19)や【いもづる式】(20)にこだわって、コンセプトのあるコレクションを作ってみるのもいいだろう。

調べ方の選択

学習をするときに

《問題》

漢字や熟語のよい調べ方がわからない。

・辞書の難しさ

漢字の辞書の使い方は難しく、初学者は目的に沿った調べ方をなかなか選択できない。

・選択という発想の欠如

目的に沿った調べ方があるという発想がなければ、調べ方を選択するという発想そのものが浮かばない。

・調べる方法のバリエーション

漢字や熟語を調べる方法には漢字の辞書をはじめとして、国語の辞書やスマートフォンなど様々な選択肢がある。

《解決》

目的に合わせた漢字の調べ方を知り、実際に調べてみる。

フォース

方法

- 漢字のだいたいの形を調べたいときには、辞書だと時間がかかるので、スマートフォンなどを用いて変換機能で形の確認をする。
- 漢字の読みを調べたいときには、まずは部首索引や総画索引でその漢字そのものを調べる。あるいは、電子辞書などに搭載されている手書き検索の機能を使う。
- 漢字の来歴を知りたい場合には、漢字辞書を使ったり、字源辞典を調べたりする。
- 調べ方を知りたいときには、図書館の司書などに相談してみる。

《結果》

いつでも同じ調べ方をするのではなく、状況と知りたいことに合わせた調べ方を選択できるようになる。

関連パターン

辞書を使えるようになることは、【言葉を知る旅】(01)をするためにはかかせない。ひとつの漢字を調べれば【いもづる式】(20)に多くの漢字を知ることでもできるし、【言葉の四次元ポケット】(14)の中身を増やしていくことにもつながっていく。

【漢字のテスト飛行】(13)をするための助けにもなってくれるので、色々な調べ方の選択肢を持っておくようにしましょう。

あえてひらがなで

学んだ漢字を活用しようとするときに

《問題》

漢字を使いすぎて、読みにくい文章になってしまう。

・漢語の難解性

漢語には難解なものもあり、読み手によっては理解しにくいものもある。

・密度の濃さ

漢字は線が多いため、多用すると文章全体の密度が高くなってしまふことがある。

・和語の性質

漢語とは異なり、和語はひらがなでも意味を取りやすい性質がある。

《解決》

なんでも漢字で書くのではなく、読み手や紙面に合わせて漢字にするかひらがなにするかを判断するようにする。

フォース

方法

- ・「歌う」「分かる」のような和語については、やわらかさを出すために「うたう」「わかる」のようにひらがなで表記してみる。
- ・子どもむけや外国人（日本語に慣れていない人）にむけて文章を書くときには、できるだけ簡単な漢字を使うようにし、熟語を和語に言い換えてひらがなにするようにする。

《結果》

読み手や紙面に合わせた読みやすい文章になる。

関連パターン

【生活を軸足に】(04) おくためには、漢字は使えば使うほどいい、という考えから離れる必要がある。覚えたものはなんでも漢字にしたくなるが、【漢字のテスト飛行】(13) を試してみ、これは漢字ではない方がわかりやすそうだな、と思ったら、あえてひらがなで書くようにすることも【自分の道を】(02) いくためには必要なことだ。

積み木としての漢字

学習をするときに

《問題》

漢字の正確な形が覚えられない。

・画数の多さ

画数が多い漢字は形が複雑になり、細かいところまで覚えるのが難しい。

・細部のミス

複雑な漢字は、細かいところで、一部分だけ間違えて覚えてしまいやすい。

・漢字の特性

漢字はいろいろな部首や旁（パーツ）の組み合わせでできている。

《解決》

漢字を自分なりにパーツごとに分けて覚えるようにする。

フォース

方法

- ・漢字をパーツで理解するように、特に部首と旁を意識して漢字の構造を捉えるようにする。
- ・同じ部首の漢字を集めてみて、それぞれの漢字がどのようなパーツとくっついているのかを眺めてみる。
- ・漢字を自分なりに分解して、自分が覚えやすいように各部分に名前を付けてパーツごとに覚え、積み木のように組み立てる。
例 頭（一、口、ノ、一、一、ノ、目、八）

《結果》

漢字の細部を間違えずに覚えることができるようになる。

関連パターン

パーツをみるときには【部首とイメージ】(19) のつながりにも期を配ってみよう。また、パーツによってはその漢字の音読みを表現しているものがある。【声で覚える】(22) ときにもパーツをよくみるようにしたい。

同じパーツを持つ漢字を集めるゲームをすると、これまで意識していなかったパーツに気がつくかもしれない。【遊びの中の学び】(09) を試してみよう。

部首とイメージ

学習をするときに

《問題》

漢字のイメージが曖昧で、どれもこれも同じような漢字に感じられてしまう。

・イメージの欠如

イメージのない漢字は、その形を思い出すことが難しくなりやすい。

・膨大な量

学習すべき漢字の量が多いため、似通った漢字は互いに行動してしまうことがある。

・部首の持つイメージ

漢字の部首はその漢字に関連するイメージを表している。

《解決》

漢字を覚えるときに、部首に注目して、それが漢字のイメージにどのように関わっているかを考えるようにする。

フォース

- ・習った漢字から部首ごとの意味を捉えるようにし、部首のイメージから漢字字体のイメージをもてるようにする。
- ・部首の部分だけ色の違うペンで書くようにして、部首のイメージを自分の中に定着させてみる。
- ・完璧の「壁」と「壁」のように、混同しやすい漢字を集めてみて、部首によってどのような意味の違いがあるかを考えてみる。

《結果》

部首とその漢字のイメージを関連させて考えられるようになり、似た感じでも部首が異なればイメージが変わることを意識できるようになる。

関連パターン

同じ部首の漢字について集める【目に見えるコレクション】(15)を作ってみよう。部首と傍の組み合わせを自然に考えることで、【積み木としての漢字】(18)であることも意識することができるようになる。

また、部首を絵に描いてみることで、【アートとしての漢字】(10)にしてみるのもよい。漢字について、より鮮やかにイメージすることができるだろう。

いもづる式

学習をするときに

《問題》

覚えても覚えても、覚えきれない。

・単体での学習

1つの漢字をひたすら書いても、なかなか頭に入らず、学習に膨大な時間がかかってしまう。

・膨大な量

覚える漢字の量が多く、1つ1つ学習していても、すべての漢字を覚えきれない。

・漢字の共通点

漢字は個々ばらばらではなく、読み方や形に共通点を持っている。

《解決》

漢字の関連性を活かした漢字学習をおこなう。

フォース

- ・同音異義語・同訓異字は、それぞれの漢字を使った文をつくり、まとめて覚える。

例「おさめる」

- ・彼は優秀な成績を修めた。
- ・大人になったら、税金を納める必要がある。
- ・やっと熱が治まりました。

- ・ペアを作り、同じ部首やつくりを持つ漢字を、思い付く限りたくさん書くというゲームをする。

《結果》

関連する漢字をいもづる式に学んでいくことで、効率よく漢字を覚えられる。

関連パターン

いもづる式に漢字を見つけていくのはおもしろい。【遊びの中の学び】(09)として色々なゲームを考えてみよう。同じ部首の漢字を集めてみることは【部首とイメージ】(19)のつながりを自然に理解することにもつながっていく。

また、【半径5mの漢字】(12)の中で関連する漢字を集めてみるのもいいだろう。クラスメイトの名前に使われている漢字をすべてリストアップしてみるのも楽しい。

意味を意識する

学習をするときに／学んだ漢字を活用しようとするときに

《問題》

その場に応じた適切な漢字を選択できない。

- ・同じ読み方の漢字

フォース

漢字の中には同音異義語や同訓異字が多く、適切に使い分けることが難しい。

- ・無意識の使用

日常生活の中でそれとなく見かけるため熟語自体は知っているものの、意味を知らないまま使っていることがある。

- ・漢字の特性

ひとつひとつの漢字には意味がある。

《解決》

形や読みと一緒に意味も合わせて覚えるようにする。

- ・「遍在」「偏在」など、似たような熟語の中で使われている漢字の意味を考え、区別をつけるようにする。
- ・熟語をそのまま読んでおぼえるだけでなく、「選択」を「選んで選ぶ（えらんでえらぶ）」「価値観」を「価値の観かた」のように、訓読みで読み下してみる。
- ・「適切」の「切」のようになぜその熟語に使われているのかすぐにはわからない漢字は、その意味を辞書で引いてみる。

《結果》

漢字の意味を理解し、その場に応じた適切な漢字を使うことができるようになる。

関連パターン

漢字には紛らわしい字も多い。【積み木としての漢字】(05)や【部首とイメージ】(19)を意識して、部首や旁と意味とをつなげて考えよう。

漢字の意味を意識するためには、字源を調べてみるなど【漢字の履歴書】(11)を考えてみるのもいいだろう。

声で覚える

学習をするときに

《問題》

漢字についての記憶がすぐに曖昧になる。

- ・従来型の漢字学習

フォース

「書く」という行為中心の漢字学習を行っているので、記憶が視覚としか関連づけられていない。

- ・音読みの覚えにくさ

訓読みはそれだけで意味が通じるため比較的覚えやすいものの、音読みは単独では意味が通じないため覚えにくい。

- ・記憶のトリガー

視覚と触覚（書く）だけでなく、聴覚にも働きかけたほうが、強い記憶になる。

《解決》

漢字を覚えるときや使うときに声に出して見るようにする。

- ・「青春のセイ」「授業のジュ」など、漢字の読みを声に出しながら漢字を書く練習をする。
- ・学習したい漢字が使われている文章を音読し、その言葉を自分の中で印象づける。
- ・「尋」のような複雑な漢字を分解して、「ヨ、エ、ロ、寸（よえぐちすん）」と口ずさみながら書いてみる。

《結果》

音に関する記憶が定着し、漢字を思い出しやすくなる。

関連パターン

視覚だけで覚えることには限界がある。【積み木としての漢字】(18)として認識するためにも、声に出して漢字を書く練習をしてみよう。書くときのリズムにもつながるので【私のための筆順】(23)を意識することにもなる。

また、「青春のアオ」など熟語を唱えながら練習すると、【意味を意識する】(21)ことにもつながって一石二鳥だ。

私のための筆順

学習をするときに

《問題》

書いているときに漢字が思い出せず、しょっちゅう手が止まってしまう。

・筆順のばらつき

筆順が一定しないと、運動機能から漢字を思い出すことができにくくなる。

・左手書字者の困難

漢字の一般的な筆順は右利き用になっているため、左手書字者は書きにくさを感じることが多い。

・運動による記憶

人は、手を動かすことによって漢字の形の記憶を補助することができる。

《解決》

自分にとって書きやすい筆順の原則を決め、それにしがって漢字を書くようにする。

フオース

- ・「上から下に書く」など、変えてしまうと漢字の形が大幅に変わってしまう原則は守りながら、自分の書きやすい筆順を模索してみる。
- ・形が崩れてしまいやすい漢字は、定められている筆順を確認し、そちらを試してみる。
- ・教科書に載っている以外の筆順を辞書や「筆順指導の手引き」で確認してみる。
- ・左手では書きにくいと思っている場合には、左利き用の筆順を用いてみる。

《結果》

自分で決めた筆順によって、体系的に漢字を思い出すことができるようになる。

関連パターン

漢字の筆順は「正解とされているもの」を守ることより、人に通じて、自分が使いやすいものが望ましい。【自分の道】(02) いくためにも、自分自身の筆順を見つめ直してみよう。

ただし、漢字一字一字によってまちまちだと余計に混乱してしまう。同じような形を持つ漢字を【いもづる式】に集めて、それらの筆順も一緒に確認していこう。

4 おわりに

以上、漢字学習についてのパターンランゲージを記述し、提案した。

これらのパターンは、【言葉を知る旅】を中心とする学習観によって記述されているものであり、すべての漢字学習者に受け入れられるものとは限らない。たとえば、【私のための筆順】というパターンは、いわゆる「正しい筆順」を重視する学習観からみれば、肯定できないパターンである。

しかし、そのことはこのパターンにおいて大きな問題ではない。このパターンのねらいは、漢字学習のイメージについての対話を起こし、より広いイメージによって漢字学習の方法が考えられるようにすることにある。このパターンに触れることで価値観の相違があらわになるとすれば、そこから対話がはじまると考えられる。

さらに、このパターンは漢字学習のイメージを広げることに寄与するとともに、2.1において述べた2点目の課題について考えるうえでの足がかりにもなると考えられる。

本稿で記述したパターンランゲージは、これまでの漢字学習に関する検討をもとに記述したため、「やさしい日本語」に代表されるような、新しい日本語には十分には対応していない。本稿のパターンランゲージを批判的に検討し、「やさしい日本語」に含まれるアイデアをさらにパターンランゲージとして発展させていくことによって、これからの日本語について語るための共通言語を作っていくことができるはずである。

たとえば【ふりがなの調整】などのパターンも考えられるだろう。Justsystem社の「一太郎」など、現在のワードプロセッサの一部には、学年別配当漢字表に合わせて、小学五年以上の漢字にふりがなをふる、などの機能も備えられている。パターンとして記述することによって、様々な日本語使用者がどのようにふりがなを使っているか、ということと共有し、対話することによって、「やさしい日本語」の使用状況を整備に寄与することもできるはずである。

本稿で記述し、提案したパターンランゲージをもとに対話学習をデザインし、発展させていくことを次の展開への課題とする。

5 参考引用文献一覧

- あべやすし[2010]「識字のユニバーサルデザイン」(かどやひでのり・あべやすし【編】『識字の社会言語学』生活書院)
- 岡篤[2002]『これならできる！ 漢字指導法』高文研
- 河村茂雄・上條春夫[2006]『学級タイプ別繰り返し学習のアイデア 小学校編』図書文化
- 河村茂雄・上條春夫[2006]『学級タイプ別繰り返し学習のアイデア 中学校編』図書文化
- 小池敏英・雲井未歎・渡邊健治・上野一彦【編著】[2002]『LD児の漢字学習とその支援』北大路書房
- 小林一仁[2002]「漢字の学習指導」(『国語科教育学研究の成果と展望』全国大学国語教育学会)
- 小森茂【監修】[2005]『漢字と仲よくなる指導法』文溪堂
- 佐藤和之[2009]「成果知者としての外国人へ災害情報を伝えるとき」(『日本語学』28-6、明治書院)
- 下村昇[2006]『日本の漢字・学校の漢字』高文研
- 下村昇[2006]『漢字の成り立ち』高文研
- 下村昇[2006]『口唱法とその周辺』高文研
- 下村昇[2006]『生きている漢字・死んでいる漢字』高文研
- 首藤久義[2003]『生活漢字の学習支援』東洋館出版社
- 棚橋尚子[2013]「漢字の学習指導に関する研究の成果と展望」(『国語科教育学研究の成果と展望II』全国大学国語教育学会)
- 千々岩弘一[2010]「[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]の指導に関する研究」(森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一『新訂国語科教育学の基礎』溪水社)

- 本堂寛【監修】[2011]『くもんの国語漢字集中学習』くもん出版
- 道村静江[2010]『口で言えれば漢字は書ける！ 盲学校から発信した漢字学習法』小学館
- 宮下久夫・篠崎五六・伊東信夫・浅川満[2006]『漢字がたのしくなる本1 改訂版』太郎次郎社
- 宮下久夫・篠崎五六・伊東信夫・浅川満[2006]『漢字がたのしくなる本2 改訂版』太郎次郎社
- 宮下久夫・篠崎五六・伊東信夫・浅川満[2006]『漢字がたのしくなる本3 改訂版』太郎次郎社
- 山本由紀子[2011]「小学校の漢字学習から見えてくるもの」(堀誠【編】『漢字・漢語・漢文の教育と指導』学文社)
- 『漢字がスラスラおぼえられる本』小学館、2011
- 『小学生の漢字力に関する実態調査 2007』ベネッセ教育総合研究所

<http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kanji/2007/> (2013年12月24日最終確認)